

大正期～昭和後期の葉山町堀内地区における地元住民による別荘地経営の展開（特集 三浦半島・葉山の歴史地理）

著者	花木 宏直，福田 綾，水島 卓磨，淵澤 祐介
雑誌名	歴史地理学野外研究
号	15
ページ	1-18
発行年	2012-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/117338

大正期～昭和後期の葉山町堀内地区における 地元住民による別荘地経営の展開

花木 宏直・福田 綾・水島 卓磨・淵澤 祐介

I はじめに

神奈川県相模湾沿岸に広がる湘南地方では、明治期より別荘地や海水浴場が展開し、今日も関東地方有数の沿岸部の行楽地となっている。湘南地方¹⁾で最も東に位置する葉山²⁾でも、明治10年代におけるベルツ博士やマルチーノ公使をはじめ外国人の別荘を端緒として、沿岸部には華族の別荘が建ち、明治27年(1894)には葉山御用邸も造営された。次いで宮家等の別荘が多く建てられ、軍人や経済界の要人等の別荘も展開した。一方、葉山にある別荘地の数は、大正期から昭和初期に急増し³⁾、昭和8～9年(1933～34)前後が最も多かった⁴⁾。当該期における葉山の別荘地の特性として、山腹へ貸地や貸別荘が展開し、中間層⁵⁾による避寒や転地療養を目的とした利用が増加した⁶⁾。つまり、葉山の別荘地の特性を検討するためには、大正期から昭和中期における別荘地の展開に注目することが必要である。

葉山をはじめ、湘南地方の別荘地に注目した研究は、地方史や建築史を中心に、数多くの蓄積がある⁷⁾。また、湘南地方のほとんどの自治体史においては、別荘地について言及されている⁸⁾。これらの研究の多くは、「別荘、海水浴など、個別のテーマや、鎌倉、鶴沼、江の島、大磯など、限定された地域をあつかうことが多く、総合的に湘南地域一帯をあつかったものは意外と数少ない」と指摘されるように⁹⁾、自治体の範囲内における別荘地の分布や利用者の属性、建築様式等についての個別の検討にとどまるものが多い。一方、湘南地方を総体的に検討した研究もみられるが¹⁰⁾、湘南地方を一括して別荘地の特性が検討され、湘

南地方の中での詳細な地域性については十分検討されていない。

また、先行研究では、別荘地化の初期に成立した別荘地や、著名人が利用する別荘地、建築様式に特徴がある別荘地に注目した研究が数多くみられる¹¹⁾。しかし、別荘地は近代期を通じて展開していることから、別荘地の特性の時代差や地域差を十分考慮する必要がある。先行研究では、現在の鎌倉市や藤沢市、大磯町などの個別の地域を対象として、別荘地の時代区分についての検討がなされている¹²⁾。これらの研究では、①明治後期以前の富裕層による別荘地、②明治後期から大正12年(1923)の関東大震災にかけての中間層による別荘地、③関東大震災から昭和初期にかけての中間層による別荘地と宅地化の展開という、おおよそ共通した時代区分が示されている。大正期から昭和初期の湘南地方では、鉄道の延伸や、鉄道会社の宣伝と結びついた海水浴の普及と関わり、別荘地から海水浴行楽地へと大衆化が展開した¹³⁾。さらに、湘南地方に限らず、大正期から昭和初期には、軽井沢や箱根といった高原避暑地も含めて、関東地方周辺の別荘地で中間層の利用が増加した¹⁴⁾。本稿の対象とする葉山でも、大正期から昭和初期に別荘地の数が最も多くなった。つまり、大正期から昭和初期に注目し検討することで、従来の研究では十分明らかにされてこなかった、近代期における別荘地の利用が最も普及した時期の特性を明らかにすることができる。

一方、大正期から昭和初期における別荘地の大衆化は、鉄道の普及や中間層の隆盛といった、時代状況や別荘地の利用者側の要因だけで生じたのではない。そもそも、別荘地には、地元住民の宅

地や農地、林地も混在している。地元住民は、別荘地への土地売却や貸地、貸家、貸間、手伝人や大工、庭師といった別荘地の維持管理の請負、食料品等の小売業での得意先の拡大をはじめ、別荘地をめぐるさまざまな生業をつくりだした。また、地域の祭礼をはじめ、別荘地の利用者と地元住民との間にはさまざまな交流もみられた。つまり、大正期から昭和初期における別荘地の大衆化は、地元住民による別荘地をめぐる生業の展開と大きく関わっていた。

さらに、昭和初期をピークに別荘地の数が減少し、第二次世界大戦後は大学の合宿所や企業の保養所、宅地への変化がみられた。この点について、先行研究には、別荘地が衰退したと指摘するものもある。しかし、地元住民の視点でみると、第二次世界大戦前後を通じて、土地や家屋を別荘地や保養所として貸していることに変わりはない。つまり、別荘地の利用者だけでなく、別荘地に居住する地元住民の視点から、別荘地の成立と展開を検討することで、先行研究とは異なる別荘地の時代区分や地域差を提示することができる。

以上を踏まえ、本稿では、大正期から昭和後期の葉山町堀内地区における、地元住民による別荘地経営や別荘地と関わる生業の展開を検討する。

従来の先行研究には、日記や利用者への直接の聞き取りや、文学作品を用いて、別荘地の利用実態を詳細に復原したものもみられる¹⁵⁾。しかし、地元住民への聞き取りや古文書の分析を通じて、地元住民の視点から別荘地の展開を検討したものは少ない¹⁶⁾。そこで、本稿の方法として、まず、旧版地形図や案内記等を用いて、湘南地方における別荘地の展開と、別荘地の景観の地域差、堀内地区の位置づけを検討する。次に、聞き取りと土地台帳をもとに、大正期から昭和初期における別荘地の成立過程と、利用の実態について検討する。続いて、堀内地区の地元有力者であった葉山家と森戸神社の古文書を用いて、大正期から昭和初期における地元住民による別荘地経営や別荘地をめぐる生業の展開、地元住民と別荘利用者との関わりを検討する。さらに、聞き取りをもとに、

第二次世界大戦後における、地元住民による貸家や貸間の経営と、別荘管理人をはじめ別荘地をめぐる生業の実態についても検討する。

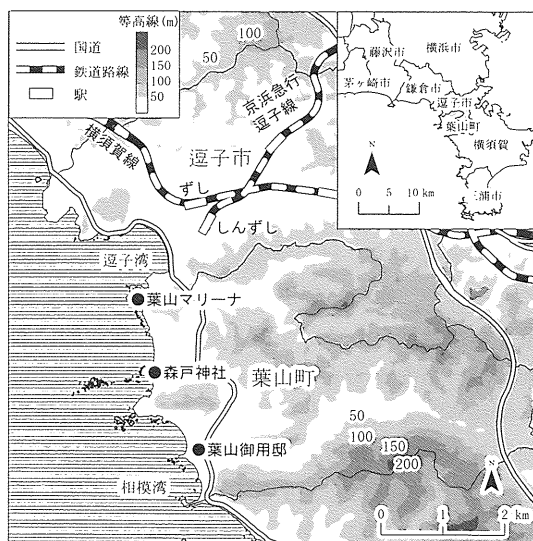
Ⅱ 湘南別荘地の地域特性と堀内地区の位置づけ

1) 湘南別荘地および逗子・葉山の概要

神奈川県三浦郡葉山町は、三浦半島の中部西側に位置し、平成23年(2011)現在では総人口32,874人を有する。西部は相模湾に面し、北部は逗子市、東部と南部は横須賀市に隣接している(第1図)。また、湘南地域の最東端ともいわれる。東部には傾斜地がみられ、西部には南北に約4.6kmの海岸線が展開し、鐙摺や森戸、一色、大浜、長者ヶ崎をはじめ海水浴場が展開する。

葉山の気候は、2月の平均気温が10.2度と、湘南地域のなかでもとくに暖かい。8月の平均気温は21.2度で、夏季の雨量は少なく、海水浴場として好条件となっている。海岸が西に開けているため、冬季は西南または西の季節風が強い。地形としては、三浦半島の中帯山地より下山川や森戸川が流れ、低地に農地や集落がみられる。

明治前期以降、日本において海水浴場が設けられるようになった。明治18年(1885)8月、陸軍



第1図 研究対象地域

軍医の松本 順の推奨により、神奈川県中郡大磯村（現大磯町）に関東で最初の海水浴場が設置された。続いて、医師の長与専斎の推奨により鎌倉地区にも開設された。さらに、茅ヶ崎をはじめ、湘南地方を中心に次々と海水浴場が設けられるようになった。葉山周辺では、明治20年代に、陸軍医の石黒忠恵によって、逗子¹⁷⁾に海水浴場が開設された¹⁸⁾。石黒の自伝『懐旧九十年』には、当時の様子が以下のように回顧されている。

明治三十五年の夏、私は始めて逗子の新宿の浜で海水浴をしました。海水浴については松本順先生が大磯を唱道せられてから、長与専斎君は鎌倉を称揚されましたが、海軍軍医大監の矢野義徹君と長谷川泰君および私はこの二か所に比して逗子の新宿の浜が遠浅で、浪が静かで、水が綺麗で、浜が細砂で、貝殻や砂利や泥がないので最も良い海水浴場であると主張したのが、その時よりすでに十年も前でありました¹⁹⁾

また、石黒が『毎日新聞』に明治30年（1897）8月8日より22日まで5回にわたって連載した「逗子紀行」には、以下のように記されている。

余は儿女に海水浴を取らせん為めに東京近所汽車の便ある地にて海水浴に適する所を選びしに、此逗子海岸を最も良と認めたり、（中略）、余は海軍々医大監矢野氏と共に頗る此所を好み、明治二十二年に矢野氏・長谷川氏と共に此処に掌大の地を購ひて、後來別墅を築かんと企て策を構へ土手を築き芝を植えたりし²⁰⁾

このことから、石黒が逗子を海水浴場として利用し始めた時期は、明治20年代前半から半ばとみられる。一方、葉山では、明治10年代に、イタリアのマルチャーノ公使やドイツのベルツ博士といった外国人による別荘地の開設や海水浴の利用、明治27年（1894）の葉山御用邸の建設を契機として、近代期を通じて多くの別荘地が建設された²¹⁾。

明治22年（1889）6月に横須賀線の逗子駅が開

業し、逗子は外国人や政治家や実業家の別荘地として急速に開発され、「養神亭」をはじめ旅館も設置された。明治27年に発行された桜井純一編『東海道鉄道遊賞旅行案内』には、「逗子駅」の項目がみられ、当時の逗子や葉山について以下のよう

に記されている。

養神亭ト云ヘルハ停車場ヨリ西凡ソ八十九町ニ在リテ海浜眺望佳ナル場所ヲ選ヒテ建築セリ、又日陰茶屋ハ更二三町許ノ西堀内村ノ口ニアリ而シテ養神亭ノ方最モ海ニ近接スルヲ以テ海水浴ハ此亭ノ方稍々便宜ナルカ如シ、此地ハ全面江ノ島ヲ隔テテ富岳ト相對シ函館伊豆ノ諸山其南西ニ連リ天城ノ峰亦其南端ニ巔然タルヲ以テ風光極メテ美シク唯々夏季避暑ニ宜シキ而已ナラス四時共ニ遊覽ニ宜シト云フ可シ、又此辺処々富豪ノ別荘アリ堀内村ヲ経海浜ニ沿ヒ往クコト凡ソ一理徐ニシテ長者園ト云ヘル所アリ、此地モ亦海水浴ニ宜シク且ツ山海ノ風色モ麗カナレバ逗子地方巡遊ノ序一タビ節ヲ曳クノ價值アリ²²⁾

つまり、この資料では、「養神亭」を起点として逗子や葉山を周遊する経路が想定されていた。また、明治33年（1900）に刊行された徳富蘆花の小説「不如帰」をはじめ、逗子を舞台とした文学作品も成立した。さらに、明治39年（1906）に逗子駅は改築され、本通りに商店街が形成されて、明治45年（1912）には逗子海岸で初の海開きが行われた²³⁾。昭和4年（1929）には、日帰り客や短期滞在者の増加に伴い、鉄道省による「海の家」が開設された。このように、逗子や葉山では、明治中期の鉄道の開業と、外国人や医師等による別荘地や御用邸の開設を契機として、別荘地が展開した。

2) 案内記にみる逗子・葉山の位置づけ

第1表は、近代期に刊行された、逗子や葉山を主に扱った案内記²⁴⁾を示したものである。第1表から、刊行年次に注目すると、主に明治30年代や

第1表 逗子・葉山を主に扱った案内記

題名	出版年次		編著者		出版者	
			氏名	住所	名称	住所
逗子案内誌	明治30	1897	高田乙三	東京府東京市 神田区鎌倉町	群書城	東京府東京市日 本橋区本石町
三浦大観	明治39	1906	佐藤善治郎		松林堂支店	神奈川県三浦郡 逗子町逗子
逗子と葉山	大正2	1913	増島信吉	神奈川県横須 賀市深田	松林堂書店／ 鈴八商店	神奈川県三浦郡 逗子町逗子／葉 山村一色
逗子八景 葉山の史蹟	大正12	1923	山崎浦義	神奈川県三浦 郡逗子町逗子	逗子八景社	神奈川県三浦郡 逗子町逗子
逗子と三浦 鳥瞰図	昭和3	1928	逗子町役場	神奈川県三浦 郡逗子町逗子	逗子町役場	神奈川県三浦郡 逗子町逗子
歴史から見た 逗子葉山案内	昭和5	1930	森戸神社	神奈川県三浦 郡葉山町堀内	幸福堂書店	神奈川県三浦郡 葉山町堀内

(各資料をもとに作成)

注) 空欄は記載のないことを示す。

大正後期から昭和初期に刊行されている。編著者や出版者に注目すると、明治30年に刊行された『逗子案内誌』は東京市の編著者や出版者による。一方、明治39年に刊行された『三浦大観』以降は、三浦半島在住の編著者により、一色地区の商店や逗子町の書店、逗子町役場によって刊行された。とくに、昭和5年(1930)の『歴史から見た逗子葉山案内』については、森戸神社が編著者となり、堀内地区の書店で刊行された。つまり、逗子や葉山にて別荘地や海水浴が定着していく中で、地元住民による別荘地や海水浴に関わる生業の1つとして、逗子や葉山の編著者や出版者による案内記の刊行が展開した。

次に、これらの案内記より、逗子や葉山の別荘地や海水浴に関わる記述に注目する。『逗子案内記』には、逗子の海水浴場について、「名高き逗子の海浜海水浴場」や「逗子の海水浴が天下無双」と記されている。「養神亭」についての項目もみられ、「浜辺の海水浴場より帰り来れば」到着することや、「後は恰かも海水浴場に当たれる湾口を望みて風色太だ佳なり」と記され、海水浴場に隣接した立地が評価されている。一方、葉山では、堀内地区の「森戸の浦」について、「風色の絶佳なるに神逝き魂と番とするの想あるべし」と記され、さまざまな漢詩が紹介されるが、海水浴

については記されていない。堀内地区にある旅館「日蔭の茶屋」(日影茶屋)や下山口地区にあった旅館「長者園」、下山口地区の「長者ヶ崎」についての項目もみられ、景勝地として記されるものの、海水浴については記されていない²⁵⁾。『三浦大観』でも、逗子については「鎌倉、大磯と鼎立して湘南の三大海水浴場と称せらる」と記されるが、葉山については「海水浴場と別荘とは鎌倉大磯には及ばざれども処々にある」と記されている²⁶⁾。さらに、『歴史から見た逗子葉山案内』における「逗子海水浴場」についての項目では、「有名な逗子海水浴場」や「近時交通の発達に共に此の地に避暑するもの年毎に多きを加へ京浜人士の間には速浅で浪穏かな稚児の浴水に適すと云ふので其の名を知られている」と記されている。また、「葉山海水浴場 森戸浜」という項目もみられ、「湘南随一の勝」と景勝地として紹介されるが、海水浴については記されていない。「長者ヶ崎」についても、景勝地として記されるものの、海水浴については記されていない²⁷⁾。

第2図は、第1表で注目した案内記や、昭和初期に作成されたとみられる森戸神社社務所『御絵葉書』より、葉山堀内地区の海岸を示した写真をまとめたものである。第2図から、『歴史から見た逗子葉山案内』では海水浴客で賑わう光景がみ



①『逗子と葉山』（大正2年（1913））



②『歴史から見た逗子葉山案内』（昭和5年（1930））



③『御絵葉書』（昭和初期カ）

第2図 堀内地区の海岸の光景
（各資料をもとに作成）

られる。一方、『逗子と葉山』では、海水浴客で賑わう光景ではなく、富士山を背景として、右手に砂浜、左手に森戸神社の社叢や岩場という構図が認められる²⁸⁾。とくに、『御絵葉書』について、堀内地区の海岸を中心に写しており、海岸に沿って別荘地や垣根がみられる。また、砂浜と別荘地の間に海水浴更衣所と推察される建物があり、砂浜には海水浴客とみられる人物と、その人物が利

用していると推察されるパラソルもみえる。これらの点から、『御絵葉書』の写真は、海水浴の行われる夏季かその前後の時に撮影された可能性が高いが、海岸は閑散としている。

つまり、明治中期から昭和初期にかけて、逗子は別荘地や海水浴場として隆盛していた。一方、葉山にも別荘地や海水浴場が展開し、景勝地としても著名であった。

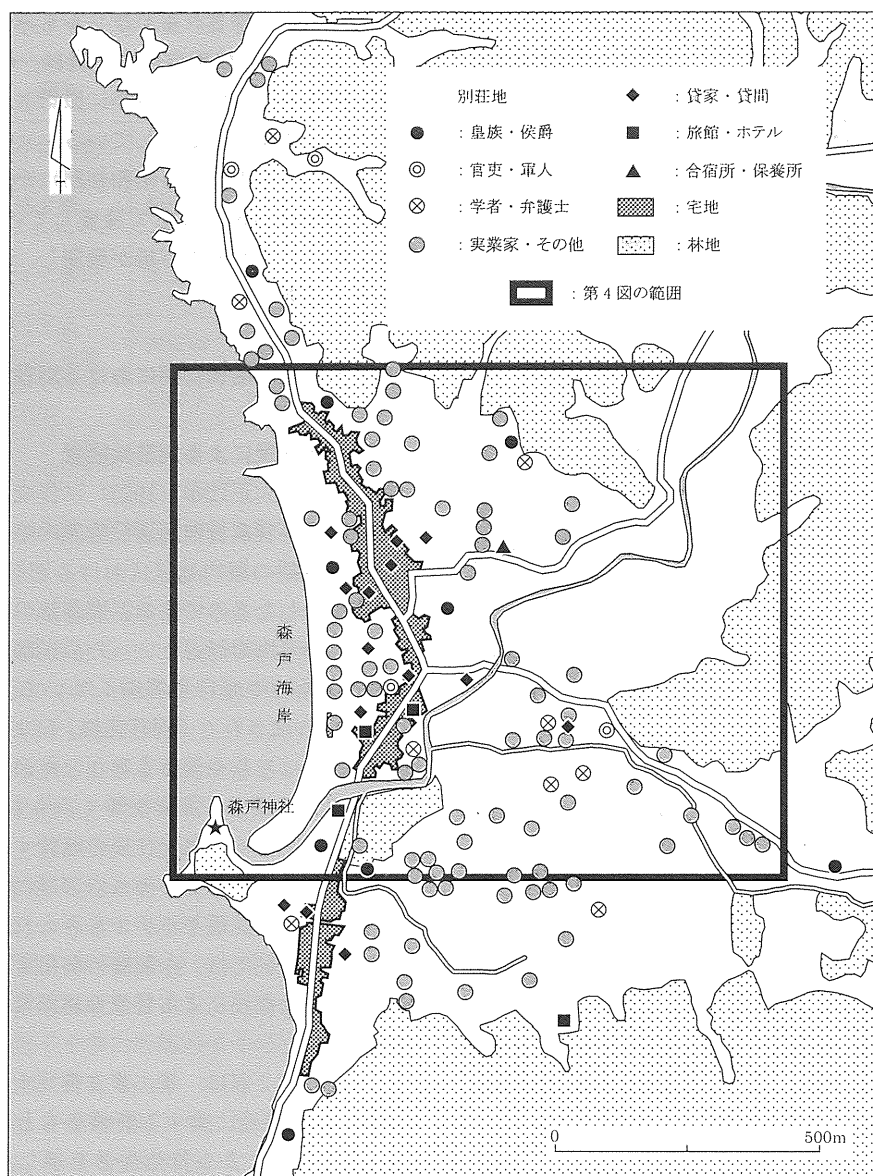
Ⅲ 大正期～昭和初期における別荘地の展開

1) 地元住民による別荘地経営

第3図は、大正12年（1923）に作成された「葉山村堀内別荘貸家貸間商店位置案内略図」をもとに、大正後期の堀内地区における別荘地や貸家、旅館等を示したものである。別荘地の立地に注目すると、森戸海岸付近といった沿岸部に加え、沿岸部と山地の間にも展開している。大正8年（1919）に作成された「別荘銘録」によれば、利用者の属性には皇族や侯爵も存在したが、官吏や軍人、学者、弁護士、実業家等もみられた。また、別荘地だけでなく、地元住民の経営する貸家や貸間と、別荘を利用しない海水浴客等に対応していたと推察される旅館やホテルもみられた。このように、堀内地区では、中間層の利用する別荘地が展開し、地元住民による貸家や旅館業も成立していた。

第4図と第2表は、葉山家文書「土地賃貸借契約書」²⁹⁾等の貸地に関する資料をもとに、大正期前後の葉山家による貸地経営を示したものである。葉山家は、近世期には堀内村の名主を務め、明治期以降は醤油醸造業に従事しており、地元有力者にあたる。

別荘地経営の年次に注目すると、資料上は事例Gの明治39年（1906）が初出であり、大正中期以降に件数が増加している。別荘地の分布に注目すると、明治中期以前に開発された沿岸部の別荘地と、明治後期に開発された山手の急傾斜地にある別荘地の中間に位置する、内陸部の緩傾斜地に多くみられる。これらの場所の地目について、別荘



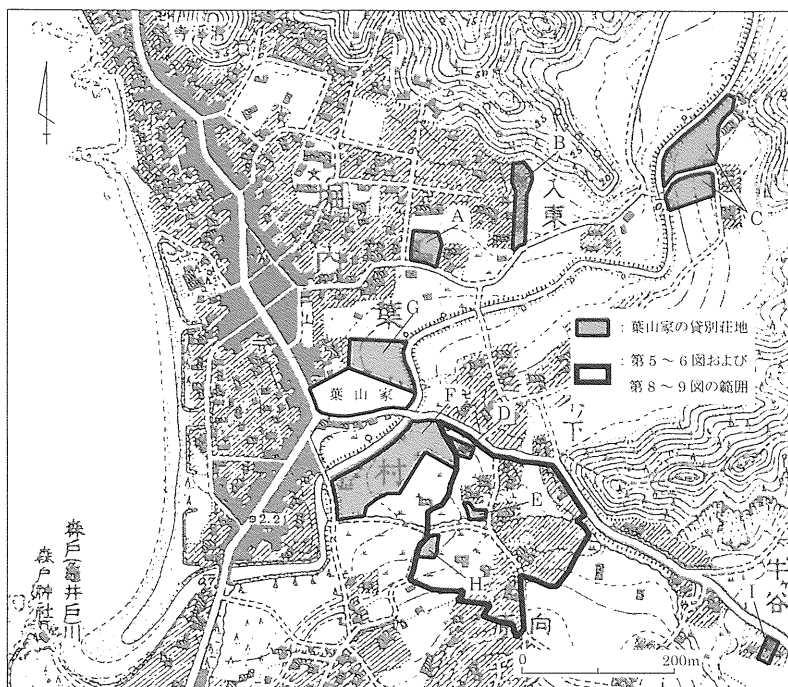
第3図 堀内地区の別荘地および関連施設－大正後期－

(「葉山村堀内別荘貸家貸間商店位置案内略図」(大正12年(1923))、「別荘銘録」(大正8年(1919))、1/10,000地形図「逗子」「一色」(大正10年(1921))をもとに作成)

地の開発前は主に田畑であった。別荘地の面積は、最も小さいものでは事例Ⅰの171坪、最も大きいものでは事例Ⅱの2,024坪であった。

利用者に注目すると、東京市や横浜市周辺の居住者を中心に貸地されていた。利用者の属性に注

目すると、化学工業薬品商や醸造業、印刷業、文房具商をはじめ、中間層にあたる人物がみられた。また、事例Ⅲの大学水泳部寄宿舍や、事例Ⅳの繊維会社をはじめ、大学の合宿所や企業の保養所としても貸地されていた。利用条件として、賃



第4図 葉山家の貸別荘地

(葉山家文書「土地賃貸借契約書」等、土地台帳、1/10,000地形図「返子」(大正10年(1921))をもとに作成)

注1) A～Iは第2表に対応する。

注2) Iの位置は推定である。

第2表 葉山家の別荘地経営

no.	面積 (坪)	賃貸料 (円)	期限	開始年月日	利用者	備考
A	406.9	0.09	10年	大正4年(1915) 2月12日	大学(東京市芝区三田)	水泳部寄宿舎、大正14年(1925)12月30日、10年間契約延長
B	937.0	0.03	20年	大正9年(1920) 7月1日	() → ()	中途解約となり利用者交代
C	1,468.0	0.02	10年	大正10年(1921) 6月1日	繊維会社(東京市京橋区銀座尾張町)	会社保養所カ
D	270.4 → 646.8	() → 0.55	() → 20年	大正8年(1919) 7月1日	化学工業薬品商(東京市日本橋区本石町) → 醸造業(東京府豊多摩郡中野町中野)	大正12年(1923)1月1日利用者交代
E	331.0	0.05	20年	大正10年(1921) 10月1日	(東京市日本橋区小田原町)	大正11年(1922)3月31日解約
F	2,024.0	0.04	20年	大正12年(1923) 5月1日	(東京市日本橋区小伝馬町)	賃貸料は最初の3年間、次の3年間0.06、次の3年間0.07、…、次の3年間0.10
G	624.25	年24.94		明治39年(1906)	(横浜市伊勢町)	大正14年(1925)解約
H	286.0 → 136.0	0.06 → 0.07	20年 → 20年	大正11年(1922) 1月1日	印刷業(東京市麹町区有楽町) → 文房具商(東京市芝区今入町)	大正12年(1923)4月4日解約、大正14年(1925)7月1日契約
I	171.0	0.02	()	明治41年(1908) 11月18日	土木請負業(東京市麹町区紀尾井町)	

(葉山家文書「土地賃貸借契約書」等をもとに作成)

注1) no. は第4図に対応する。

注2) 賃貸料は1坪、1月当りの金額(円)を示す。「年」は1年当りの総額(円)を示す。

注3) 面積と賃貸料、期限、利用者の矢印は、利用者が交代した際の変動を示す。

注4) () は記載のないことを示す。

賃料は1坪当月2銭から2円8銭程度であり、10年または20年契約であった。ただし、事例Bでは大正9年（1920）に20年契約で貸地したが、解約となり別の人物へ継続して貸地した。事例Dでは、大正8年に貸地したが、大正12年には利用者が変わり、改めて20年契約を結んだ。事例Hでは、大正11年（1922）に20年契約で貸地したが、大正12年には解約され、大正14年（1925）に別の人物へ20年契約で貸地した。このように、契約期間内に解約される事例もみられた。また、事例Fでは、資料上は大正12年に貸地したと記されているが、昭和中期まで水田や遊水地であり、別荘地としての利用はみられなかった。さらに、大正12年という年次から、契約期間内での解約や契約の不履行には、関東大震災の影響も大きかったと推察される。なお、葉山家の別荘地は貸地のみであり、土地の売却はみられなかった³⁰⁾。

つまり、大正期から昭和初期には、地元有力者の葉山家をはじめ、地元住民による別荘地経営が展開した。葉山家の経営する別荘地は、堀内地区の沿岸部等の周辺の別荘地より後の時期に開発された。また、利用者の交代が頻繁にみられ、別荘地として開発されなかった事例も存在した。

2) 別荘の利用実態

次に、大正期から昭和初期に別荘地の展開した地区の1つであり、葉山家の経営する別荘地もみられた堀内地区東部に注目して、別荘の利用実態を検討する。第5図と第6図、第3表は、聞き取りや土地台帳等をもとに、昭和10年（1935）における、堀内地区東部の土地所有と土地利用を示したものである。

まず、山手の別荘地に注目すると、明治後期から大正前期にかけて、学者や医者、日銀総裁等が土地を購入し、別荘地が成立した。また、事例mは、昭和3年（1928）以前は銀行経営者が別荘地として所有していたが、昭和3年に東京市日本橋区の不動産会社へ所有者が移転し、昭和5年（1930）に別の人物が取得した。つまり、別荘地の開発には、東京市の不動産会社の関わりもみら

れた。

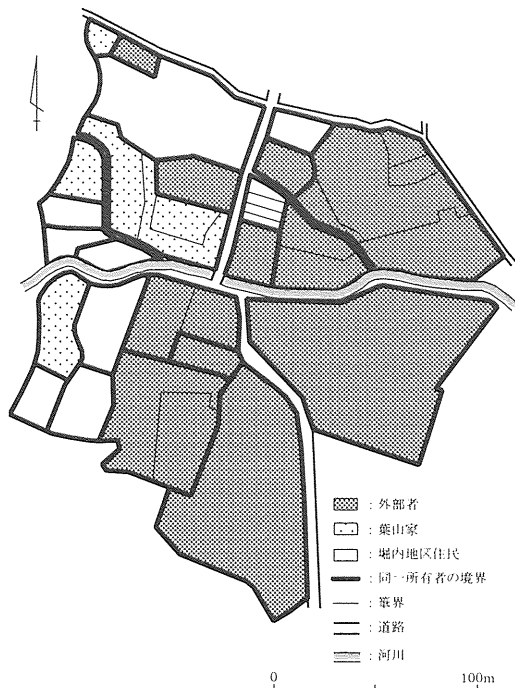
一方、緩傾斜地の別荘地に注目すると、醸造業や弁護士、能楽師、製造業の従事者をはじめとする別荘地がみられた。これらの土地は、別荘地の利用者により所有されていたものもあるが、葉山家をはじめ地元住民からの借地もみられた。また、明治期以前より居住する地元住民や、手伝人等の紹介業に従事した住民もみられた。さらに、宅地だけでなく、田地や畑地も混在していた。

次に別荘地の取得の経緯について、大正11年に葉山家より別荘地を借地したα家の事例を中心に検討する。α家は代々中部地方で酒造業を営んでいたが、事情により後進に店を譲り東京に移住した。その後、新規事業で成功し、大正10年（1921）には売上が最大となった。そして、大正11年に葉山家より堀内地区の土地を借地し、別荘として利用した。その際、現地の女性を手伝人として雇用了。α家の別荘地の利用については、主に夏季の避暑が中心であった。夏季にはα家の家族に加え、経営する会社の関係者をはじめさまざまな来訪者がみられた。また、α家には男子がおり、この男子の転地療養も別荘利用の要因の1つとなった。つまり、大正期から昭和初期には、中間層による別荘地の借地や、転地療養を目的とした別荘地の利用がみられた。

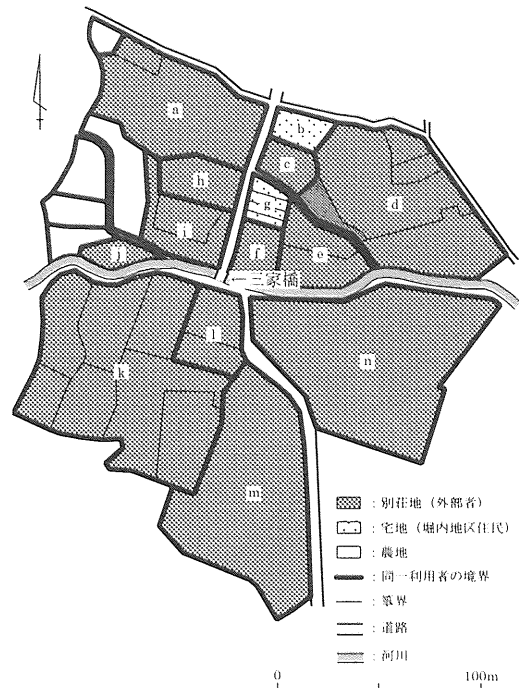
3) 別荘地をめぐる生業の展開

大正期から昭和初期にかけて、別荘地の増加を背景に、地元住民は別荘地をめぐるさまざまな生業に従事した。守屋家文書「官有地使用願」等の資料には、森戸神社の神主を代々務める守屋家や地元住民が、森戸神社の境内を海水浴更衣所に使用する際の申請書が多くみられた。第7図と第4表は、「官有地使用願」等をもとに、森戸海岸における海水浴更衣所を示したものである。

年次に注目すると、海水浴更衣所は、資料上は明治37年（1904）から大正6年（1917）にかけて、7～8月に設置がみられた。立地について、年次により相違がみられるが、おおよそ森戸神社付近の森戸海岸に立地していた。なお、大正12年の



第5図 堀内地区東部の土地所有－昭和10年
(1935)－
(地籍図、土地台帳をもとに作成)



第6図 堀内地区東部の土地利用－昭和10年
(1935)－
(聞き取り、地籍図、土地台帳をもとに作成)
注）a～nは第3表と対応する。

第3表 堀内地区東部の宅地－昭和10年（1935）－

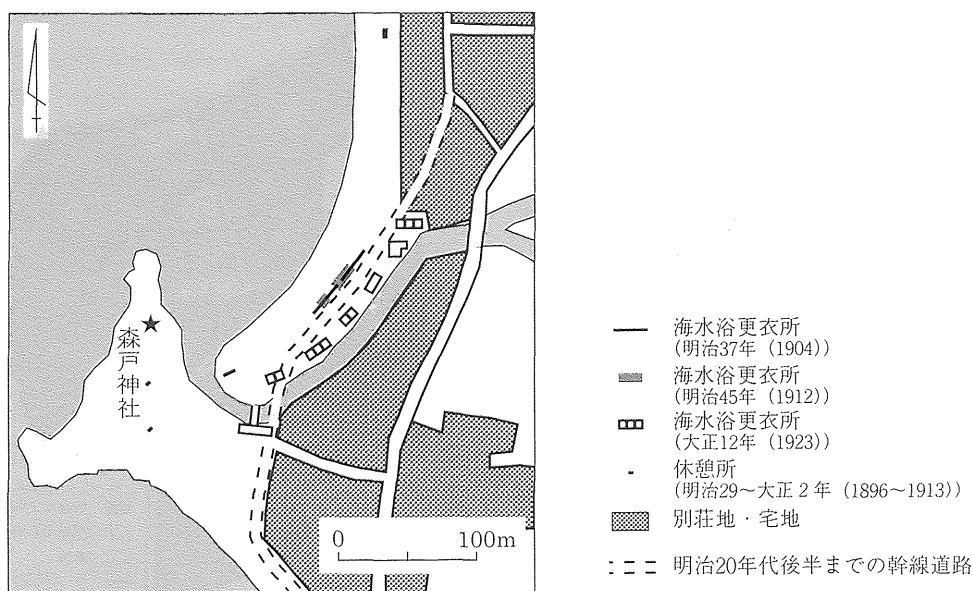
no.	居住者		取得年次	取得形態	取得以前の状況
a	東京府豊多摩郡中野町 中野	醸造業	大正11年（1922）	葉山家等より借地、 一部購入	別荘地、田地
b	堀内	明治期以前からの地元住民			
c	東京市麻布区本村町	無職	大正 6 年（1917）	購入	別荘地
d	東京市赤坂区永川町	日銀総裁	大正 5 年（1916）	購入	別荘地、畑地
e	東京市赤坂区青山南町	紡績会社社長、商社社長等	昭和 4 年（1929）	購入	田地、畑地
f	東京市牛込区新小川町	能楽師	昭和 2 年（1927）	購入	別荘地
g	堀内	紹介業	大正 8 年（1919）	購入	別荘地、田地
h	東京市神田区松住町	弁護士	大正 8 年（1919）	購入	田地、畑地
i	東京市品川区東品川	製造業	大正11年（1922）	葉山家より借地	別荘地
j				地元住民より借地	田地
k	東京市牛込区若宮町	生物学者・地理学者、農学校講師	大正 7 年（1918）	葉山家等より借地、 一部購入	田地、畑地
l	東京市本郷区本郷	映画会社社長	昭和10年（1935）	購入	別荘地
m	東京市本郷区駒込曙町	呉服商	昭和 5 年（1930）	購入	別荘地
n	東京市小石川区駕籠町	医学博士、大学名誉教授、天皇侍医	明治35年（1902）	購入	田地、畑地

（聞き取り、土地台帳、『日本紳士録』等をもとに作成）

注1）no. は第6図と対応する。

注2）属性は昭和10年（1935）当時のものを示す。

注3）空欄は不明である。



第7図 森戸海岸における海水浴更衣所と休憩所
 (守屋家文書「官有地使用願」等、「葉山村堀内別荘貸家貸間商店位置案内略図」をもとに作成)

第4表 森戸海岸の海水浴更衣所

申請年月日				面積 (町、反、畝、歩)	使用料 (1月、円)	期間	申請者	形態
明治 37	1904	7	7	0.0.1.01	1.240	7～8月	守屋喜代太郎、保証人大倉濱吉、鈴木留吉	15間×1間=2ヶ所、1間×1間=1ヶ所
明治 37	1904	7	26	0.0.0.26	1.040	8月	守屋喜代太郎、保証人大倉濱吉、鈴木留吉	15間×1間=2ヶ所、4間×1間=1ヶ所
明治 37	1904	8	1	0.0.0.15	0.600	8月	守屋喜代太郎、保証人大倉濱吉、鈴木留吉	15間×1間=1ヶ所
明治 38	1905	7	15	0.0.2.06	5.280	7～8月	守屋喜代太郎、保証人矢嶋仁右衛門、矢嶋喜三郎	15間×1間=4ヶ所、4間×1間=1ヶ所
明治 39	1906	7	6	0.0.1.15	3.600	7～8月	守屋喜代太郎、保証人矢嶋仁右衛門、矢嶋喜三郎	15間×1間=5ヶ所、1棟は1ヶ月、4棟は2ヶ月使用
明治 39	1906	7	6	0.0.1.00	1.200	7～8月	守屋喜代太郎、保証人矢嶋仁右衛門、矢嶋喜三郎	15間×1間=5ヶ所、1棟は1ヶ月、4棟は2ヶ月使用
明治 40	1907	7	15	0.0.1.00	2.400	7～8月	守屋喜代太郎、保証人矢嶋仁右衛門、矢嶋喜三郎	15間×1間=5ヶ所、2棟は1ヶ月、3棟は2ヶ月使用
明治 40	1907	7	15	0.0.1.25	1.800	8月	守屋喜代太郎、保証人矢嶋仁右衛門、矢嶋喜三郎	15間×1間=5ヶ所、2棟は1ヶ月、3棟は2ヶ月使用
明治 41	1908	7	30	0.0.0.10			社掌守屋喜代太郎	
大正 1	1912	7	9	0.0.2.00	6.000	7～8月	矢部五兵衛、社掌守屋喜代太郎、葉山清右衛門、角田庄右衛門、矢嶋常吉	10間×4間=1ヶ所、15間×4間=1ヶ所
大正 4	1915	7	19	0.0.0.12	0.600	8月	矢部五兵衛、社掌守屋喜代太郎	6間×3間=1ヶ所
大正 5	1916	6		0.0.0.20	1.200	7～8月	矢部五兵衛、社掌守屋喜代太郎	7間×3間=1ヶ所、3間×3間=1ヶ所
大正 6	1917	7		0.0.0.20	1.200	7～8月	矢部五兵衛、社掌守屋喜代太郎	10間×5間=1ヶ所

(守屋家文書「官有地使用願」等をもとに作成)

注) 空欄は記載のないことを示す。

「葉山村堀内別荘貸家貸間商店位置案内略図」にも、大正前期以前よりやや海岸線より離れた位置に、「個人更衣所」が11棟と「共同更衣所」が1棟描かれていた。森戸海岸には、昭和30年代まで海水浴更衣所が設置されていた。

海水浴更衣所の申請者について、全員が森戸神社の氏子であり、堀内地区の地元住民が中心であった³¹⁾。とくに、大正元年（1912）と大正4年（1915）から6年にかけて申請を行った矢部五兵衛は、明治17年（1884）の葉山町役場文書「鑑札御下付願」には薪炭商と記され、大正12年の「葉山村堀内別荘貸家貸間商店位置案内略図」には堀内地区に矢部五兵衛商店とある。ただし、矢部五兵衛をはじめ、申請者による別荘地経営については確認できなかった。

海水浴更衣所の利用の実態について、年次により規模に相違がみられるが、1棟当り15間×1間のものが5棟設置される事例等がみられた。大正期以降は、10間×5間をはじめ、より大型のものもみられた。構造に注目すると、大正元年の申請書によれば、「柱は杉丸太を用ひ屋根及周囲は麦藁葺簾簾等にて造る」という状況であった。海水浴更衣所は、内陸部の別荘地の利用者に対する更衣を目的としており、飲食物の販売をはじめ、現在の海の家にあたるサービスは行われていなかった³²⁾。

第5表は、守屋家文書「日々茶代売上帳」等の茶店の帳簿をもとに、森戸神社の茶店の取扱品目を示したものである。この資料によれば、明治29年（1896）から大正2年（1913）にかけて、7～9月前後に森戸神社境内に茶店がみられた。また、第6図には、森戸神社境内の休憩所も示した。守屋家文書「官有地使用願」等には、明治29年から大正2年にかけて、森戸神社境内に休憩所を2棟設置する申請書がみられる。申請書によれば、設置期間は12ヶ月間となっているが、申請された年次は茶店の帳簿とおおよそ一致する。つまり、森戸神社の茶店とは、森戸神社境内の休憩所を利用して飲食物の販売を行っていたと推察される。なお、昭和初期には、森戸神社境内に茶店は出店さ

第5表 森戸神社茶店の取扱品目

年次		品目
明治29	1896	茶、まんじゅう、らむね、くわし、桃実、塩せんべい、和菓子
明治30	1897	菓子、ラムネ、玉子、さつまいも、いも
明治31	1898	茶、らむね、なし、かし、くわし、あんぱん
明治32	1899	茶、なし、らむね、いも、まんぢう
明治33	1900	茶、らむね、なし、かし、くわし、あんぱん、なし、さつまいも、いも
明治34	1901	茶、ぱん、らむね、玉子、菓子、なし、うり、いも、水あめ、おきなあめ、もろこし、たばこ、こなやかし、ふうげつかし
明治38	1905	茶、くわし、たばこ、いも、はつか、らむね、なし
明治39	1906	茶、くわし、らむね、ビール、小びんビール、いも、なし、ぶどう、もも
明治40	1907	茶、なし、せいようなし、らむね、いも、まんぢう、もも、いも、たばこ、さいた、はたんきょう
明治43	1910	桜印サイダー、錨印サイダー、シトロソール、キリンビール、エビスビール、三矢サイダー、金線サイダー、正宗
大正2	1913	茶、くわし、サイダー、三矢サイダー、せんべい、たばこ

（守屋家文書「日々茶代売上帳」等をもとに作成）
注）表記は資料通りである。

れていなかった³³⁾。

茶店の経営には、守屋家の関係者や、森戸神社周辺に居住する女性に従事していた。取扱品目に注目すると、茶や饅頭や飴菓子をはじめとする菓子類、ラムネやサイダー等の飲料品、ビール等の酒類、タバコ等がみられた。とくに、「ふうげつかし」すなわち風月堂で製造されたとみられる菓子や、「ぱん」ないし「あんぱん」、「玉子」、「せいようなし」や「もも」等の果実といった、東京市や横浜市方面からの仕入や、高級な嗜好品とみられる商品もみられた。なお、明治39年と明治40年（1907）の帳簿には、「せいようなし、高梨つなしま」や「いも、つなしま」という記述がみられた。この記述から、茶店で販売する洋ナシや甘藷について、大正期までに果樹産地が成立していた綱島地区（現横浜市港北区）からの入荷もみられたと推察される。また、守屋家文書「茶代うり上通」

によれば、明治43年（1910）には、堀内地区の商店よりサイダー等の飲料品やビール等の酒類の入荷がみられた。茶店では、毎年25円前後の売上がみられた。

第6表は、葉山家文書「醤油注文帳」³⁴⁾をもとに、昭和14年（1939）11月から昭和15年（1940）11月にかけての、別荘地や葉山以外の居住者からの注文を示したものである。「醤油注文帳」によれば、葉山家の醤油や味噌の注文先として、堀内地区をはじめ、北部では逗子町（現逗子市）、東部では横須賀市中心市街、南部では一色地区や秋谷地区（現横須賀市秋谷）、長井地区（現横須賀市長井）、三崎地区（現三浦市三崎地区）等、三浦半島西部を中心に広域に展開していた。

また、東京市四谷区の歯科器械商や、東京市渋谷区の建築業の別荘地からの注文がみられた。さらに、東京市日本橋区のタオル商をはじめ、千葉県市川市、東京市京橋区、杉並区といった葉山以外の居住者からの注文もみられた。これらの住民は、「醤油注文帳」に「別荘」と記されていないが、堀内地区周辺の別荘地からの注文であったと推察される。注文の時期は、歯科器械商の別荘地では、別荘の利用が盛んになる7～8月に多くみられた。ただし、夏季以外にも注文がみられ、これは避寒目的等での別荘の利用と関わると推察される。とくに、昭和15年1月23日と30日には、別荘1より石炭の注文もみられた。

つまり、葉山家では、葉山以外の居住者や別荘地に対して、醤油や味噌の販売先を展開した。また、昭和10年代半ばには、夏季に限らず、避寒をはじめ別荘地の通年利用の増加がみられたと推察される。葉山家でも、冬季における石炭の販売といった、別荘地の利用のあり方の変化への対応もみられた。

4) 別荘地の利用者と地元住民との交流

別荘地の利用者と地元住民との交流について、守屋家文書「森戸神社祭典費出入控帳」によると、秋季大祭の費用として、氏子への集金がみられた。同資料によれば、第6図の範囲付近では、大正13

第6表 別荘地や葉山以外の居住者による葉山家への注文

注文者		年月日				品目
別荘1	一色／東京市渋谷区幡ヶ谷原町		昭和15	1940	1	味噌1貫目
			昭和15	1940	1	23 石炭200斤
			昭和15	1940	1	31 石炭15貫
			昭和15	1940	2	21 味噌1貫目
			昭和15	1940	3	30 味噌1貫目、味噌1貫目
			昭和15	1940	4	27 「葉」醤油1樽、味噌1貫目
			昭和15	1940	5	29 味噌1貫目
			昭和15	1940	7	12 味噌1貫目
			昭和15	1940	8	2 「葉」醤油1樽
			昭和15	1940	8	18 味噌1貫目
			昭和15	1940	10	2 味噌1貫目
			昭和15	1940	10	28 味噌1貫目
			昭和15	1940	11	18 「葉」醤油1樽
別荘2	堀内／東京市四谷区伝馬町	歯科器械商	昭和15	1940	7	24 味噌300匁
			昭和15	1940	7	27 味噌500匁
			昭和15	1940	8	6 味噌500匁
			昭和15	1940	8	12 味噌500匁
			昭和15	1940	8	20 味噌500匁
別荘3	一色／東京市渋谷区青葉町	建築業	昭和14	1939	12	2 「太」醤油0.5樽
			昭和15	1940	2	3 「太」醤油0.5樽
			昭和15	1940	3	20 味噌500匁
1	東京市日本橋区横山町、本郷区	タオル商	昭和14	1939	12	16 味噌180匁入1樽、粒味噌4.5貫入1樽、「葉」醤油1樽
			昭和15	1940	1	24 味噌180匁入1樽
			昭和15	1940	2	24 粒味噌4.5貫入（一）
			昭和15	1940	3	8 味噌180匁入1樽
			昭和15	1940	3	23 「葉」醤油大1樽
			昭和15	1940	3	30 味噌4.5貫入1樽
			昭和15	1940	4	13 味噌180匁入1樽
			昭和15	1940	4	23 味噌180匁入1樽
			昭和15	1940	5	21 味噌180匁入1樽
			昭和15	1940	6	4 味噌18貫入（一）
			昭和15	1940	7	14 味噌18貫入1樽
			昭和15	1940	8	2 粒味噌■100匁
			昭和15	1940	8	9 「葉」醤油4斗入（一）
			昭和15	1940	9	5 味噌180匁入1樽
			昭和15	1940	10	11 味噌4貫目入1樽、味噌180匁入1樽
			昭和15	1940	10	24 「葉」醤油4斗入1樽
			昭和15	1940	11	13 味噌180匁入1樽
2	千葉県市川市市川		昭和14	1939	12	3 味噌4.5貫入1樽、「葉」醤油1樽
			昭和15	1940	2	24 「葉」醤油1樽
			昭和15	1940	5	11 「葉」醤油1樽、味噌4.5貫入1樽
			昭和15	1940	10	9 「葉」醤油1樽
3	東京市日本橋区本町		昭和15	1940	2	25 味噌4.5貫入1樽
			昭和15	1940	6	7 味噌4.5貫入1樽
4	東京市京橋区本挽町		昭和14	1939	12	12 味噌4.5貫入1樽、味噌2貫入1樽
5	東京市杉並区阿佐ヶ谷		昭和15	1940	6	22 味噌2貫目
6	横浜市中区本牧町		昭和15	1940	7	5 「葉」醤油1樽

（葉山家文書「醤油注文帳」、『日本紳士録』をもとに作成。）

注1) ■は判読不能であることを示す。

注2) 注文者の空欄は不明であることを示す。

注3) (一)は数量不明であることを示す。

年（1924）の場合、堀内地区東部にある高砂町^{たかさな}では22戸で46円51銭、向原町^{むかいばら}では12戸で12円50銭であった。区域により金額の相違がみられるが、氏子1戸当り1～2円程度であった。

また、氏子への集金とは別に、地元住民や外部者からの寄進も多くみられた。第7表は、「森戸神社祭典費出入控帳」より、堀内地区東部の別荘地の利用者からの寄進を示したものである。第7表から、別荘地を利用している期間には、氏子の2倍以上の金額にあたる、2～5円程度の寄進が恒常的に行われていた。また、大正後期には、山手にある別荘地の利用者より、10円や15円といった高額の寄進もみられた。なお、別荘地の利用者は、氏子数は地元住民の戸数と一致することや、別荘地の利用者は通年居住していなかったことから、氏子には加入していなかったと推察される。

秋季大祭の費用は、相撲の勧請や演劇興行等に利用された。寄進は半ば義務的な側面をもつが、秋季大祭への寄進を通じて、別荘地の利用者が地元の行事に対して協力していた様子がみられる。

なお、別荘地の利用者は、祭礼だけでなく、堀内地区内での道路建設や架橋といった土木工事にも寄進した。第6図の範囲には、森戸川の支流に「三家橋」という橋がみられる。「三家橋」の由来について、架橋以前には「三家橋」付近の森戸川の支流には橋が少なく、迂回しなければならなかった。そこで、大正期に、第6図のkとm、nに別荘地を所有していた3家が寄進して架橋したことから、「三軒橋」と名づけられ、「三家橋」と転訛した³⁵⁾。つまり、土木工事への寄進は、地元への貢献という側面だけでなく、自身の別荘地利用の利便性の向上という性格をもっていた。

第7表 別荘地の利用者による森戸神社秋季大祭への寄進

no.	寄進者		年次											
			1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926
a	東京市日本橋区本石町	化学工業薬品商						5.00	5.00	5.00				
	東京府豊多摩郡中野町中野	醸造業										5.00	5.00	5.00
c	東京市牛込区若葉王寺町		2.00	2.00										
	東京市麻布区本村町	無職			2.00	3.00	5.00	5.00	5.00	5.00		5.00	5.00	5.00
d	東京市赤坂区氷川町	日銀総裁			3.00	3.00	5.00	5.00	5.00	5.00		5.00	5.00	10.00
f	東京市京橋区銀町	洋酒商						5.00	5.00	5.00		3.00	3.00	10.00
h	東京市神田区松住町	弁護士					2.00	3.00	3.00	3.00		3.00	3.00	5.00
i	東京市日本橋区小田原町													
	東京市品川区東品川	製造業										5.00	5.00	5.00
k	東京市牛込区若宮町	生物学者、地理学者、農学校講師							7.00	7.00		10.00	10.00	7.00
m	東京府豊多摩郡渋谷町下渋谷	銀行経営	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	5.00	5.00	5.00		15.00	15.00	15.00
n	東京市小石川区駕籠町	医学博士、大学名誉教授、天皇侍医	3.00	3.00	3.00	3.00	5.00	5.00	5.00	5.00		5.00	5.00	5.00

（守屋家文書「森戸神社祭典費出入控帳」、聞き取り、土地台帳をもとに作成）

注1）no. は第6図に対応する。

注2）同一区画における寄進者の変化は別荘地の利用者の交代を、空欄は属性が不明であることを示す。

注3）網かけは外部者が別荘地を取得した期間を示す。

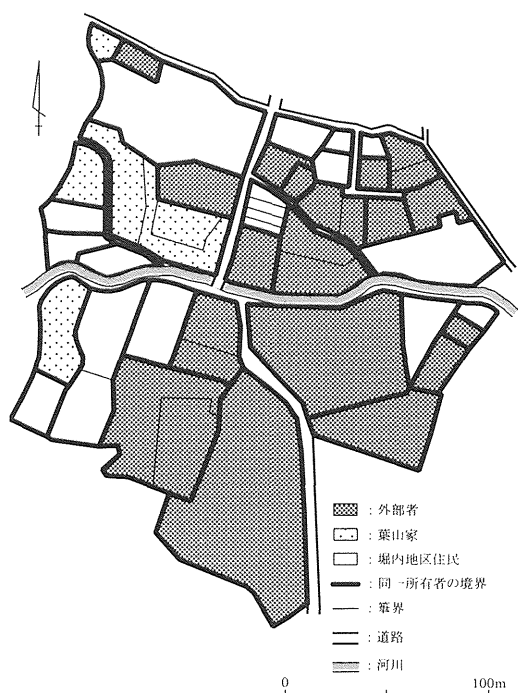
注4）金額の単位は円である。

注5）大正12年（1923）には寄進の資料がみられない。

Ⅳ 第二次世界大戦後における貸家・貸間経営 と別荘地をめぐる生業の展開

1) 別荘地の宅地化

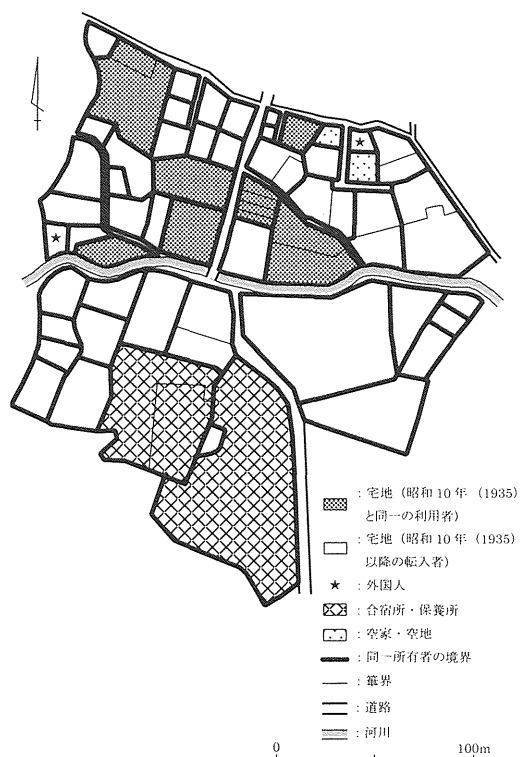
第8図と第9図は、聞き取りや土地台帳、『逗子市葉山町明細地図』昭和39年（1964）版等をもとに、昭和30年代後半における、堀内地区東部の土地所有と土地利用を示したものである。山手の別荘地に注目すると、昭和10年（1935）に医者や日銀総裁の別荘地であった区画では、分筆が進み宅地となっている。これらの区画には、主に、東京都や堀内地区に居住する、昭和20年代以降に新たに転入してきた住民が居住している。また、別荘地の分筆による宅地化や、学校法人の合宿所や証券会社の保養所への転用がみられた。



第8図 堀内地区東部の土地所有－昭和30年代後半－
(地籍図、土地台帳をもとに作成)

一方、緩傾斜地の別荘地に注目すると、筆界や土地所有は昭和10年とおおよそ同じであった。土地利用について、土地台帳では同じ土地所有者と記されていても、「逗子市葉山町明細地図」では細分化された宅地が示されている区画がみられた。宅地の分譲は、主に昭和10年以前より居住する住民の所有地で行われた。

堀内地区東部の住民について、昭和10年前後と同じ位置に居住する者がみられた。この中には、第二次世界大戦で東京市の住居が被災したため、昭和20年代以降は堀内地区の別荘地に転入した住民もみられた。一方、昭和20年代以降に新たに転入してきた住民には、会社役員をはじめ、中間層にあたる住民も存在した。さらに、葉山には外国人も多く居住し、このうち堀内地区東部では2戸



第9図 堀内地区東部の土地利用－昭和30年代後半－
(聞き取り、『逗子市葉山町明細地図』昭和39年（1964）版、地籍図、土地台帳をもとに作成)

みられた。

つまり、堀内地区東部では、富裕層の別荘地は宅地や大学の合宿所、企業の保養所となった。中間層の別荘地や地元住民の所有地では、宅地の分譲もみられた。住民には、昭和10年代以前より居住する地元住民や、戦災のため昭和20年代に自身の別荘地へ転入してきた住民に加え、外国人を含む新たに転入してきた住民もみられた。

2) 貸家・貸間の成立

先述の通り、堀内地区では、大正後期や昭和初期に、商業者等の地元住民により、貸家や貸間の経営がみられた。一方、第二次世界大戦後には、一般の地元住民による貸家や貸間の経営が急増し、昭和30年代を中心に盛んにみられた。『逗子市葉山町明細地図』昭和39年版にも、大学の合宿所や企業の保養所をはじめ、貸家として利用されていたと推察される住宅が多く示されている。ただし、これらの資料では、別荘地と地元住民の宅地の区別ができず、とくに貸間については十分示されているとはいえない。そこで、地元住民への聞き取りをもとに、第二次世界大戦後における貸家や貸間の経営や利用実態を検討する。

昭和20～30年代の貸家や貸間は、主に漁家をはじめ地元住民が従事し、夏季に母屋を貸して納屋に居住した。貸家や貸間は主に集落内に立地し、茅葺き屋根をもつ平屋建ての一軒家という構造の貸家も存在した。また、地元住民は、別荘地の管理人として、年間を通じて建物の管理や従事し、夏季には別荘地の利用者に対して食事の支度も行った。別荘地や貸家、貸間の利用者のある夏季の2ヶ月間で、約1年分の収入を得る者も存在した。昭和26年（1951）に逗子町立逗子中学校に赴任した元教師によれば、生徒の中には別荘地等の手伝人や育児補助に従事する女子が多数みられた。

3) 貸家・貸間経営と別荘に関わる生業への従事

第二次世界大戦後には、一般の地元住民は貸家や貸間の経営に従事するとともに、別荘の管理人

や植木職人、大工をはじめ別荘に関わる生業に従事した。これらの生業への従事者は、昭和初期以前に別荘地として成立した宅地に居住する主に外部出身の住民ではなく、従来の集落に居住する地元住民であった。本稿では、堀内地区北部のβ氏（男性）と、一色地区のγ氏（女性）の事例を中心に検討する。

まず、堀内地区に居住するβ氏は、昭和20年（1945）に堀内地区で生まれ、東京都心部の企業へ勤務していた。堀内地区に居住し、会社まで2時間30～40分ほどかけて通勤していた。β家では、昭和47～48年（1972～73）の7月中旬から8月下旬にかけて、堀内地区の自宅の2階を大手総合商社に貸間し、主に海水浴客の更衣所として利用された。大人は隣接する鑑摺地区のヨットハーバーへ出かけ、子どもは地先の岩場等で遊んだ。昭和57年（1982）には、β氏の父母が退職を契機に、堀内地区北部にある大学の合宿所の管理人に従事した。β氏も、同年に会社を退職し、平成18年（2006）まで管理人に従事した。主な仕事としては、β家で鍵を管理し、β氏夫妻とパートタイムの従業員数人で、朝と昼、夕方の食事の準備や掃除等に従事した。主な利用者には、大学の野球部やソフトボール部、囲碁将棋部、戦友会等があり、夏季だけでなく秋季や冬季にも利用された。昭和50年代後半には、年間1,600人が利用した。また、β氏は従来、機械メーカーの厚生部に勤務していたため、退職した会社に対して、葉山周辺において保養所として貸間を2軒紹介した。

β氏の事例から、β氏は堀内地区から東京都まで通勤しており、堀内地区は大都市のベッドタウンとしての性格も認められた。また、昭和40年代に一時、会社への勤務を続けながら貸間経営に従事した。一方、昭和57年以降は、会社を退職して、パートタイマーも雇用しながら、合宿所の管理人を専業としていた。つまり、昭和40～50年代の堀内地区は宅地化が進み、別荘地としての比重が小さくなった。また、大学の合宿所や企業の保養所も展開し、これらの施設の管理人として生計を維持する住民が成立した。

次に、一色地区に居住するγ氏は、大正14年(1925)に東京で生まれ、大手建築業者に勤務する大工であった夫と結婚し、久良岐郡金沢町(現横浜市金沢区)に居住した。しかし、夫の逝去と、昭和40年代における息子の結婚に伴い、一色地区にある嫁の生家へ移住した。嫁の家族は皇室関連業務に従事しており、吹上御所から葉山御用邸への転属に伴い一色地区へ転入した。γ氏は昭和40年代前後より、知人の紹介で米軍士官のベビーシッターに従事した。当初は逗子市池子地区の米軍住宅に居住する士官宅に3年間務め、横浜市本牧地区の「ベイ・ビュー」という米軍住宅に居住する士官宅にも出向した。その後、知人の紹介にて資産家の邸宅の手伝人に従事した。さらに、知人の紹介により、昭和42年(1967)から平成14年(2002)まで鎌倉市にて手伝人に従事した。

一色地区のγ家の家屋は、大正12年(1923)の関東大震災直後に完成したものである。昭和40～50年代の夏季には、母屋を大手ホテルに貸家し、別棟も一時貸家とした。なお、γ家の向いの住民は、夏季に海の家を経営していた。

γ氏の事例から、γ氏の嫁の家族は皇室関連業務に従事しており、一色地区には葉山御用邸に近接して御用邸関係者の居住がみられた。γ氏は別荘地の手伝人ではないが、昭和40年代以降は知人の紹介により米軍士官や資産家等の手伝人に従事した。また、γ家もβ家と同じく、夏季に貸家や貸間を経営していた。つまり、堀内地区をはじめ葉山では、別荘管理人や手伝人、貸家や貸間の経営といった、一般の地元住民にも別荘に関わる生業が普及していた。

V 結論

本稿では、大正期から昭和50年代の葉山町堀内地区を対象として、当該期間の特徴である、地元住民による別荘地や貸家・貸間経営の成立と展開を検討した。

湘南地方では、御雇外国人による別荘の設置や、鉄道の開業に伴い、明治前期より別荘地の開

発が展開した。葉山付近においても、明治中期には堀内地区にベルツ博士やマルチーノ公使といった外国人の別荘地の成立や、明治27年(1894)に一色地区へ葉山御用邸も造営されたことを契機に、別荘地が展開した。近代期に刊行された案内記に注目すると、葉山に隣接し鉄道が通じている逗子では別荘地や海水浴が隆盛していった。一方、堀内地区をはじめ葉山にも別荘地や海水浴が展開し、景勝地としても著名であった。

大正期から昭和初期の堀内地区では、葉山家といった地主による貸地や、地元住民による農地の転売により、山腹の傾斜地に別荘地が展開した。これらの別荘地には、主に東京市や横浜市等に居住する、実業家をはじめ中間層にあたる住民が利用した。また、堀内地区の海岸には、内陸部の別荘地の利用者に対し、海水浴更衣所が設置された。堀内地区の住民には、別荘利用者や海水浴客の増加する夏季に茶店を開業する者や、別荘地の利用者へ得意先を展開する商業者もみられた。別荘地の利用者は、祭礼における高額の寄付をはじめ、地元住民との交流がみられた。

第二次世界大戦後には、別荘地の宅地化や、大学の合宿所や企業の保養所への転用がみられた。また、一般の地元住民により、海水浴客に対し、民家を利用した貸家や貸間の経営が増加した。さらに、大学の合宿所や企業の保養所の管理人や、別荘地等への手伝人に従事する者が多くみられた。地元住民は、主に知人の紹介によりこれらの生業に就業し、専業として生計を維持する住民もみられた。

つまり、別荘地開発の最盛期であった大正期から昭和後期の堀内地区では、地主による農地の転売や貸地による別荘地の開発、一般の地域住民による貸家や貸間の経営、合宿所や保養所の管理人や手伝人等の別荘地に関わる生業が盛んに行われた。また、夏季の別荘地の利用者や海水浴客に対し、海水浴更衣所や茶店、貸間といった生業も展開した。一方、別荘地の利用者は、祭礼等を通じて地元住民との交流がみられた。これらの過程を経て、葉山は別荘地として展開した。

付 記

本稿の作成にあたり、葉山郷土史研究会古文書部会の皆様や森戸神社・守屋大光氏をはじめ、葉山町在住の皆様には大変お世話になりました。また、葉山政夫氏や森戸神社・守屋大光氏、神奈川県立公文書館には、資料の閲覧や複写のご許可をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。本稿は、Ⅱ章1節を福田 綾、Ⅲ章3節を淵澤祐介、Ⅳ章を水島卓磨、Ⅰ章とⅡ章2節、Ⅲ章1・2・4節、Ⅴ章を花木宏直が執筆した。

注および参考文献

- 1) 本稿では、三浦半島西海岸から酒匂川河口付近までを、湘南地方として扱う。
- 2) 本稿では、現葉山町を構成する堀内地区と長柄地区、一色地区、下山口地区、上山口地区、木古庭地区の総称として、「葉山」と表記する。近世期から近代期の葉山の生業については、武田周一郎・岩田明日香・山石 勉(2012)：三浦丘陵における山野利用の変遷－葉山町木古庭地区を中心にして－、歴史地理学野外研究, 15, 19～34, を参照されたい。
- 3) 光栄の葉山編集刊行会編(1940)：『光栄の葉山：葉山郷土の発達史』, 横須賀乳幼児保護会助成会出版部, 177～178。
- 4) 高梨 炳編(1975)：『葉山町郷土史』, 葉山町, 93ページ。
- 5) 本稿では、大正期以降に事業の拡大等により成立した新たな資産家を「中間層」と表記する。
- 6) 杉浦敬彦(2007)：『葉山の別荘』, 用美社, 124ページ。
- 7) ①岡崎恵美子編・発行(2007)：『茅ヶ崎の別荘みである記』。②石塚裕道(1975)：明治・大正期における湘南海岸の開発の歴史－鶴沼・辻堂の海水浴場・別荘地・演習場を中心に－, 藤沢市史研究, 7, 1～14, など。8)～16)も参照されたい。
- 8) ①前掲4), 84～107。②葉山町総務部企画課編(2004)：『葉山町80年の歩み』, 葉山町, 39～40。③逗子市編・発行(1997)：『逗子市史 通史編 古代・中世・近世・近代編』, 721～761。④鎌倉市市史編さん委員会編(1994)：『鎌倉市史 近代通史編』, 吉川弘文館, 132～187。⑤茅ヶ崎市編・発行(1981)：『茅ヶ崎市史4 通史編』, 505～532。⑥大磯町編・発行(2008)：『大磯町史7 通史編近現代』。⑦二宮町教育委員会編・発行(1985)：『二宮町近代史話』, 328～335。⑧二宮町編・発行(1994)：『二宮町史 通史編』, 683～684。⑨小田原市編・発行(2001)：『小田原市史 通史編 近現代』, 268～276。なお、『平塚市史』には別荘地や海水浴への言及がみられなかった。
- 9) 小風秀雄(2005)：歴史のなかの地域イメージ、「湘南の誕生」研究会編, 『湘南の誕生』, 藤沢市教育委員会, 2005, 4ページ。
- 10) ①神奈川県県民部県史編纂室編(1980)：『神奈川県史 通史編4 近代・現代(1)』, 神奈川県, 897～904。②高野 修(1989)：湘南の別荘, 神奈川文化, 337, 6～14。③島本千也編・発行(2000)：『海辺の憩い－湘南別荘物語－』。④島本千也(2005)：湘南の別荘地化－鶴沼地区を中心にして－, 「湘南の誕生」研究会編, 『湘南の誕生』, 藤沢市教育委員会, 48～69。
- 11) ①葉山環境文化デザイン集団編・発行(2003)：『葉山の別荘と景観』。②池田京子(2011)：堀内の宮家・華族の別荘, 郷土誌葉山, 8, 55～59。③出澤敏雄(2011)：葉山に別荘を持った日本銀行総裁, 郷土誌葉山, 8, 60～61。④東 哲郎(2007)：茅ヶ崎の別荘図－景観と別荘人の横顔－, 茅ヶ崎市史研究, 31, 17～32。⑤水沼淑子(2008)：大磯における初期別荘建築の様相について－旧大磯町行政資料による検討－, 大磯町史研究, 15, 133～146。また, ⑥西尾桂子(2009)：葉山一色と團家の歴史, 歴史トーク湘南・葉山, 4, 5～23。⑦田嶋修三(2009)：葉山の別荘の変遷－そこから見えるもの－, 歴史トーク湘南・葉山, 4, 44～70, をはじめ, 葉山近現代史を語る会編(2006～09)『歴史トーク湘南・葉山』1～4には, 昭和初期より葉山町域の別荘地に居住した経験をもつ者や商業に従事した者による, 実体験に基づく別荘地と地元住民との交流が記されており意義深い。
- 12) ①佐々木哲也(1997)：大正・昭和初期における大磯町別荘所有者の特徴－大磯町各別荘所有者調べを素材として－, 大磯町史研究, 5, 61～76。②島本千也(2002)：鎌倉の別荘族の時代区分について, 鎌倉, 95, 41～47。③八田恵子(2005)：湘南地域の住宅地化と海水浴場－鶴沼地区を中心に－, 藤沢市史研究, 38, 66～86。
- 13) ①田中啓爾(1934)：避暑避寒兼用地としての関東付近の臨海休養地, 地理学, 2-5, 75～80。②中川浩一(1983)：「猫」の眼がみた海水浴, トランスポート, 148, 50～55。③小口千明(1998)：療養から行楽型海水浴への変容と各地の海水浴場, 地方史研究, 275, 9～14。④本宮一男(2005)：行楽地湘南の確立－大衆化の進展と『観光』地－, 「湘南の誕

- 生」研究会編、『湘南の誕生』、藤沢市教育委員会、112～134。
- 14) ①十代田朗・渡辺貴介・安島博幸（1992）：戦前の関東圏における別荘の立地とその類型に関する研究、日本建築学会計画系論文報告集、436、79～86。②斎藤 功（1994）：わが国最初の高原避暑地宮ノ下と箱根－明治期を中心に－、人文地理学研究、18、133～161。③佐藤大祐・斎藤 功（1999）：明治・大正期の軽井沢における高原避暑地の形成と別荘所有者の変遷、歴史地理学、46-3、1～20。
- 15) ①平山孝通（2003）：柳田別荘の思い出－柳田為正氏の聞き書きより－、文化資料館調査研究報告、11、21～29。②酒井宣子（2004）：金沢における井伊家・大橋家別荘と大橋養鶏場、六浦文化研究、12、71～83。③八田恵子（2004）：大磯町における別荘と地域社会－別荘所有者の記憶を通じて－、大磯町史研究、11、27～46。④島本千也（2006）：華族の別荘生活－茅ヶ崎土井利剛別荘『松潮園日記』を読む－、茅ヶ崎市史研究、30、17～34。⑤鈴木雅子編（2001）：『第二回 葉山文学散歩』、ウォッチングの会。⑥鈴木雅子編（2004）：『第三回 葉山文学散歩』、ウォッチングの会。また、⑦E.ベルツ（1951）：『ベルツの日記』、岩波書店、をはじめ別荘地の利用者自身の記した日記の翻刻や、⑧植田紗加栄（1997）：『そして、風が走りぬけて行った：天才ジャズピアニスト守安祥太郎の生涯』、講談社、をはじめ葉山の別荘地の利用実態を示した文学作品も多い。
- 16) 長尾洋子（2011）：昭和戦前期におけるレジャーのかたち 福井家とレジャー革命、東西南北、11、80～108。
- 17) 本稿では、現逗子市を構成する逗子と新宿地区、桜山地区、沼間地区、久木地区、小坪地区の総称として、「逗子」と表記する。
- 18) 石黒忠恵は、弘化2年（1845）、父である平野良忠の任地である奥州伊達郡（現福島県）に生まれ、のち父の祖家越後の石黒姓を継いだ。20歳で医師を志し上京し医学所に入所したが、その時の頭取が松本良順（兵部省軍医頭）であり、このことが軍医の道を選ぶ契機となった。明治20年（1887）には、ドイツのバーデンで開催される第4回万国赤十字国際会議へ政府委員の一人として派遣された。
- 19) 石黒忠恵（1983）：『懐旧九十年』、岩波文庫、137ページ。
- 20) 明治27年（1894）、石黒は逗子の土地を別荘地用にと購入したが、その後、別荘は建設せず、その土地は福島有信に譲り渡したという。
- 21) 前掲4）、107ページ。
- 22) 桜井純一編（1894）：『東海道鉄道遊覧旅行案内』、丸善商社、60～61。読点は筆者による。
- 23) 逗子市編・発行（1985）：『逗子市史 通史編 古代・中世・近世・近現代編』、742～750。
- 24) 三浦半島を扱った案内記や、鎌倉地区を扱った案内記等にも、逗子や葉山について記されるものもある。本稿では、逗子や葉山を中心に扱った案内記や、逗子や葉山で刊行された案内記として、6つの資料に注目する。
- 25) ①高田乙三（1897）：『逗子案内誌』、群書城、10ページ、16ページ、17ページ、19～20、32ページ、33ページ。なお、②山崎浦義（1923）：『逗子八景 葉山の史蹟』、逗子八景社、については、『逗子案内誌』が引用されており、内容は重複している。
- 26) 佐藤善治郎（1906）：『逗子と葉山』、松林堂支店、17ページ、32ページ。
- 27) 森戸神社編（1930）：『歴史から見た逗子葉山案内』、幸福堂書店、11ページ、19ページ、44～45。
- 28) 逗子や葉山を扱った案内記には、第2図で示した堀内地区の海岸を写した構図ではなく、森戸神社を中心に写し、背景に海岸も示される構図が多数みられる。本稿では、堀内地区における別荘地や海水浴の利用の実態を検討することを目的としたため、森戸神社を写した写真については割愛した。
- 29) 「土地賃貸借契約書」等の資料は、葉山家の貸地経営に関するものである。ただし、利用者の多くは東京や横浜に居住していたことや、大学の寄宿舎と明記されるものもあることから、貸地の目的は主に別荘地経営であったとみられる。なお、堀内地区にはいくつかの系統の葉山家がある。「土地賃貸借契約書」等に示された貸地は、土地台帳によれば全て本稿で注目する葉山家の土地であった。
- 30) 先代が大正期に葉山家より別荘地を借地した地域住民への聞き取りによる。
- 31) 森戸神社への聞き取りによる。
- 32) 森戸神社への聞き取りによる。
- 33) 森戸神社への聞き取りによる。
- 34) 「醤油注文帳」は、大正3年（1914）から昭和17年（1942）にかけて作成されており、葉山家への醤油や味噌等の注文先や注文内容について記されている。
- 35) くれ竹通信編集部編（2009）：くれ竹通信、48、3ページ。